

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：13201

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18H00665

研究課題名(和文) 北方危機諸言語の形成プロセスの解明に向けたネットワーク強化

研究課題名(英文) Network Reinforcement toward the Formative Process Elucidation of Endangered Northern Languages

研究代表者

呉人 恵 (Kurebito, Megumi)

富山大学・人文学部・名誉教授

研究者番号：90223106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本北方言語学会を母体として、環北太平洋地域の先住民諸言語を対象に大きく2つの課題を解決すべく取り組んできた。すなわち、国際的にも日本が傑出したリーダーシップを発揮してきた北東アジア諸言語研究の一層の発展と国際化を通じた、アルタイ諸語と古アジア諸語の相互影響と形成プロセスの解明、ジェサップ北太平洋探検隊以来、注目が集められてきた北東アジアと北米の先住民諸言語の系統的・類型的相互関係の究明。

2020年以降、コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻など、現地調査を旨とする本研究にとって障碍となる出来事が続いたが、迅速に代替措置を講じるなどして予定通りの成果をあげることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義としては、北東アジアと北米を「環北太平洋域」として結びつけ、両者を横断する形で研究交流を図る初の試みの場として、日本北方言語学会を設立し、この地域の先住民諸言語に関するデータを集積したことが挙げられる。

社会的意義としては、論文集『北方言語研究』や資料集『北方言語研究別冊』を刊行し、北海道大学学術成果コレクションHUSCAPにて公開し、研究の国際的認知につなげたことが挙げられる。

研究成果の概要(英文)：This study, with the Japan Association of Northern Language Studies as its parent organization, has been working to solve two major problems in the field of indigenous languages of the North Pacific Rim. The first is to elucidate the mutual influence and formation process of Altaic and Paleo-Asiatic languages through internationalization of the study of Northeast Asian languages, in which Japan has shown outstanding international leadership, and the second is to investigate the genetic and typological interrelationships between the indigenous languages of Northeast Asia and North America, which have attracted much attention since the Jessup North Pacific Expedition.

Although the Corona pandemic, Russia's invasion of Ukraine, and other events since 2020 have continued to hinder our research, which is based on field research, we were able to quickly take alternative measures and produce results as planned.

研究分野：言語学、コリヤーク語学

キーワード：北方危機諸言語 ネットワーク強化 環北太平洋域 系統と類型 日本北方言語学会 言語接触 形成プロセス ネットワーク強化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

本研究でいう「北方諸言語」とは、旧大陸側の北東アジア諸言語を主に指しながらも、新大陸側の北米先住民諸言語をも視野に入れた概念である。本研究では、「北方諸言語はどのように影響しあいながら形成されてきたのか？また、それは各言語の類型的特徴に、どのような痕跡を留めているのか？」という「問い」を設定し、その解明のために、音韻・文法面での類型論的比較研究を推進する。以下ではまず、本研究開始当初の研究状況や背景について述べる。

(1) 1990年以降の北東アジア諸言語研究の飛躍的展開：

北東アジアには、大きく、アルタイ諸語と古アジア諸語という2つの言語グループが分布している。前者は、モンゴル語族、ツングース語族、チュルク語族からなる。後者は、ケツ語、ユカギール語、チュクチ・カムチャツカ語族、エスキモー・アリユート語族、ニヴフ語、(アイヌ語)からなる。日本におけるこれら北方諸言語の研究は、1990年代以降、ロシアにおけるペレストロイカ、中国における民主化を契機に、めざましく活発化した。これまで資本主義国の外国人には閉ざされていた北東アジアのフィールドが解放され、現地調査に基づき記述研究に取り組む研究者がそれぞれ専門とする言語について数多くの貴重な成果を挙げてきた。具体的には、1990年代に入るとすぐ、チュルク系のドルガン語、ツングース系のナーナイ語、古アジア諸語のコリマ・ユカギール語、チュクチ語、コリヤーク語の現地調査が開始された。この後、1990年代後半からは、ツングース系のウデヘ語、ウイルトタ語、古アジア諸語のコリマ・ユカギール語、イテリメン語、アリユートル語、ニヴフ語などに関する現地調査がこれに続いた。さらに、2000年に入ると、ツングース系のウイルトタ語、エウェン語、エヴェンキ語、ウイルトタ語、ウデヘ語などに関して、若手研究者が続々と現地調査を開始した。おそらく、この地域のこれだけ多くの言語の調査に研究者を送り出したのは、日本を置いて他にないであろう。北東アジア諸言語に関する一次資料は飛躍的に増加し、類型論的比較の基盤も醸成されつつあった。折しも、本研究代表者である呉人は、基盤研究(B)「北東アジア危機言語の記述と類型に関するネットワーク構築」(22320075平成22-26年度、代表者：津曲敏郎)に分担者として参画し、代表者と分担者2名だけで、研究成果を可視化するべく取り組んだ結果、査読付学術専門誌『北方言語研究』の1-8号までの刊行、音声資料を含む一次資料のデジタルデータ化とHUSCAP(北海道大学学術成果コレクション)での公開を実現することができた。

(2) 受け皿としての研究母体の必要性：

しかしながら、この地域全体を包括しうるような、受け皿的研究母体はそれまで存在していなかった。研究者たちが、優れた研究成果という正の面だけでなく、話者の高齢化や減少、優勢言語への急激な同化により、言語の復興保持はおろか、現地調査で新たな言語事実を掘り起こす可能性も年々狭められてきているという負の面にも直面していることを考えると、各研究者の研究成果や問題意識を共有する場を準備することが、次なるステップとして喫緊の課題となっていた。

(3) 環北太平洋地域諸言語の比較研究への足掛かり：

さらに、北東アジア諸言語研究の成果をもとに、「環北太平洋域」(宮岡 1992)という言語領域として提唱されながら、総合的研究が十分に実現されていなかった北東アジア諸言語と北米先住民諸言語の関係解明に向けた基盤作りをおこなうことも重要になってきた。特に、古アジア諸語は、人類の旧大陸から新大陸への移住の跡をとどめる言語として、新旧両大陸の「橋渡しの言語」(渡辺 1992)とも呼ばれ、北東アジアと北米を「環北太平洋域」というひとつの言語領域として提唱する柱骨ともなった言語である。すでに、音韻面でも文法面でも稀少な現象に関して、北米先住民諸言語との類似性が指摘されている。アルタイ諸語と古アジア諸語は、相互に隣接ないし重なり合って分布していることから、接触による言語変容の問題についても重要な知見を提供してきた。このように、北方諸言語の価値は、一般言語学的にも計り知れず、一刻も早い記述・比較研究が俟たれる所以であった。以上が、本研究を発足させるにいたった経緯と背景である。

宮岡伯人(編)(1992)『北の言語：類型と歴史』東京：三省堂書店

渡辺己(1992)「新旧両大陸の要：チュクチ・カムチャツカ語族」宮岡編、147-163.

2. 研究の目的

本研究では、「北方諸言語はどのように影響しあいながら形成されてきたのか？また、それは各言語の類型的特徴に、どのような痕跡を留めているのか？」という「問い」を設定し、その解明のために、音韻・文法面での類型論的比較研究を推進する。すなわち、北東アジア諸言語の相互影響と形成の諸相の解明、さらには、「環北太平洋域」として括られることがある北東アジアと北米先住民諸言語の関係解明に向けて、研究者間ならびに現地コミュニティとの国際的ネットワーク構築に繋がる基盤作りをめざす。具体的には、記述・類型研

究、資料集積、研究者間ならびに現地コミュニティとのネットワーク構築に関し、次の諸点の実現に取り組む。

- (1) 記述・類型研究：個別言語の記述研究と諸言語間の類型論的比較研究の推進
- (2) 資料集積：音声資料等の一次資料のデータベース化と電子媒体としての統合と拡充
- (3) 研究者間ネットワーク：「日本北方言語学会」設立、WEBサイト開設、研究会・国際シンポジウム開催、既存学術専門誌『北方言語研究』の学会誌化と英語論文の査読体制整備
- (4) 現地コミュニティとのネットワーク：フォーラム型情報相互発信ミュージアム試行

3. 研究の方法

上記(1)～(4)の実現のため、次のような方法で研究をおこなった。メンバーは代表者の呉人と若手研究者である分担者の江畑の2名だけの小さなユニットだが、それにより、効率的運営を目指すとともに、運営上のノウハウを若い世代へ継承し、発展的持続可能性が担保できるような体制づくりに配慮した。

- (1) 記述・類型研究：呉人はコリヤーク語(古アジア諸語)、江畑はサハ語・トゥバ語(チュルク語族)と、各自の専門言語の記述研究を、各年度1回ずつの現地調査により継承発展させる(ただし、コロナ禍とウクライナ問題により、令和元年以降、現地調査はおこなえず)。加えて、アルタイ諸語、古アジア諸語間の類型論的比較研究を推進する。平成30年度はまず、類型論的比較研究の体制作りをおこない、その後の研究成果は、国際シンポジウムという形で内外に示すことを視野に入れた。
- (2) 資料集積：音声資料や民話資料などを収集しデジタル化する。なお、北海道大学学術成果コレクション HUSCAP を収集データの蓄積場所として利用する。
- (3) 研究者間ネットワーク：平成30年度に「日本北方言語学会」を設立し、その後、毎年、WEBサイトの管理、学会誌としての『北方言語研究』の刊行や研究会の主催に取り組む。それにより、北方諸言語研究の社会的認知度を高める。また、英語論文の査読体制整備等、英語論文を寄稿しやすい環境作りに取り組む。
- (4) 現地コミュニティとのネットワーク：北方地域は、現地へのアクセスが困難で、一次資料の収集も容易ではない地域である。しかし、近年はこの地域でもインターネットの普及がめざましく、現地コミュニティとの関わり方にも変化の兆しが見られる。そこで、そのような新しい変化に対応するべく、モノとこれらに関する言語情報を現地コミュニティもアクセス可能な方法でWEB公開し、現地からも日本からも情報相互発信が可能なシステムを構築する。それにより現地調査ができなくても、リアルタイムで言語情報が集積できる仕組み作りにつなげる(ただし、ウクライナ問題により実現かなわず)。

4. 研究成果

本研究は、開始当初、2018-2021年度の予定でスタートしたが、上記の通り、コロナ禍、ロシアのウクライナ問題の影響により現地調査ができなくなり、当初予定していた通りに研究が進まなくなったため、2023年度まで延長されることになった。現地調査はできなくなったが、下記の代替手段を講じることにより相応の成果を挙げて研究を終了することができた。以下では、上記(1)～(4)に沿って、研究成果を述べる。

- (1) 記述・類型研究：呉人、江畑ともに現地調査はできなくなったが、これまで収集してきた一次資料を頼りに、それぞれの専門言語に関する論文をコンスタントに執筆した。具体的には呉人は、コリヤーク語の母音調和、コピュラ表現、与格名詞、複統合性に関し査読付き論文を執筆した。江畑は、サハ語、トゥバ語の証拠性、膠着性、複統合性について査読付き論文を執筆したほか、対格標示と情報構造、疑問詞疑問接辞、数量詞など広範なテーマについて考察をおこなった。
2021年11月6-7日に、日本北方言語学会第4回大会(国際シンポジウム)を対面式(北海道立北方民族博物館)とオンライン(Zoomミーティング)のハイブリッドにより開催し、国内の発表者のみならず、フィンランド、韓国などの研究者による講演もおこなった。
- (2) 資料集積：呉人は、これまで収集したコリヤーク語の語りのテキストを2018、2019年度に *Koryak Text 4, 5* として刊行した。さらに、2023年度には、音声資料を付したテキスト *Koryak Text 1 with Audio Materials* を刊行し、HUSCAPで公開した。
- (3) 研究者ネットワーク：2018年12月に日本北方言語学会を設立し、呉人が初代会長、江畑が初代事務局長となった。それにともない、学会HPの開設、学会誌『北方言語研究』の刊行(9号以降)、研究会の主催などをおこない、学会の社会的認知度の向上に努めた。ちなみに、学会設立当初、会員は20名ほどであったが、2024年3

月時点で国内外あわせて約 100 名となった。『北方言語研究』は、8 号までは和文論文のみ投稿可能であったが、9 号以降は英文論文の投稿も可能にした。その結果、9 号 4 本（全 10 本中）、10 号 5 本（全 16 本中）、11 号 3 本（全 15 本中）、12 号 5 本（全 14 本中）、13 号 3 本（全 14 本中）、14 号 3 本（全 18 本中）とコンスタントに英文論文が掲載されるようになった。さらに、近年、留学生（修士・博士課程）の投稿も増加してきていることに鑑み、若手研究者支援の一環として日本語英文校閲サービスを導入し、投稿しやすい環境整備に務めた。加えて、この間『北方言語研究特別号』、『エヴェンキ語、ニヴフ語、コリヤーク語のテキストを収録した『北方言語研究別冊』1-3 号も刊行した（いずれも HUSCAP にて公開）。また、2024 年 3 月時点で計 6 回の研究大会を開催した。

- (4) 現地コミュニティとのネットワーク：上述の通り、コロナ禍、ウクライナ問題により現地調査ができなくなっただけでなく、現地との連絡も滞ってしまったため、インターネット上の情報相互発信システムの開発に着手することができなかった。ただし、ここ数年で SNS を利用した現地との連絡にはそれほど支障がないことがわかってきたため、今後も引き続き、できる範囲内で現地コミュニティとのネットワーク作りの可能性を模索していきたいと考えている。

以上、本研究は当初予想していた以上の成果を挙げることができ、北東アジア諸言語と北米先住民諸言語の比較研究をより前面に据えた次なる研究（基盤 B「環北太平洋危機言語の形成プロセスの解明に向けた地域類型論の構築」[23K21929, 2022-2026 年度, 代表者：呉人恵]）へと発展的に継承させるにいたっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計17件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 呉人 恵	4. 巻 100
2. 論文標題 コリャーク語チャウチュヴァン方言における3 系列の母音調和	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アジア・アフリカ言語文化研究	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 呉人 恵	4. 巻 11
2. 論文標題 コリャーク語のデキゴトを表わす名詞的用法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 37-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉人 恵	4. 巻 なし
2. 論文標題 コリャーク語の所有構造における名詞句階層と譲渡可能性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 津曲敏郎先生古稀記念集	6. 最初と最後の頁 227-242
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉人 恵	4. 巻 なし
2. 論文標題 コリャーク語における関係節構造 名詞句接近可能性階層及び主名詞配列タイプに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語と世界の言語の名詞修飾表現	6. 最初と最後の頁 151-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Kurebito, Megumi	4. 巻 6
2. 論文標題 Koryak	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Mermaid Construction: A Compound-Predicate Construction With Biclausal Appearance (Comparative Handbooks of Linguistics)	6. 最初と最後の頁 817-849
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑冬生	4. 巻 3
2. 論文標題 サハ語における証拠性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑冬生	4. 巻 3
2. 論文標題 トゥバ語における証拠性と自己性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 15-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑冬生	4. 巻 なし
2. 論文標題 サハ語(ヤカート語)の所有構造	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 津曲敏郎先生古稀記念集	6. 最初と最後の頁 214-226
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 呉人 恵	4. 巻 10
2. 論文標題 コリャーク語の複統合性再考：その「新しさ」と人称スロットの特異性をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 41-59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 呉人 恵	4. 巻 3
2. 論文標題 コリャーク語の所有表現と名詞句階層 英語との共通性に着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 富山大学人文学部叢書 人文知のカレイドスコープ	6. 最初と最後の頁 28-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑冬生	4. 巻 2
2. 論文標題 サハ語とトゥバ語の主題マーカー	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 41-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Ebata, Fuyuki	4. 巻 10
2. 論文標題 Agglutinateness, polysynthesis and syntactic derivation in Northeastern Eurasian languages.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 呉人恵	4. 巻 9
2. 論文標題 コリャーク語の与格名詞をめぐる諸現象について 充当相, S=A交替, 授与動詞	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 13-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 呉人恵・笹倉いる美	4. 巻 28
2. 論文標題 北海道立北方民族博物館所蔵コリャーク・コレクション公開の新たな試み：SNSを利用した現地との双方向的情報交換	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道立北方民族博物館紀要	6. 最初と最後の頁 117-123
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑冬生	4. 巻 1
2. 論文標題 サハ語の数量詞句	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言語の類型的特徴対照研究会論集	6. 最初と最後の頁 43-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 江畑冬生	4. 巻 9
2. 論文標題 トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dirの機能：話し手・聞き手の認識からの説明	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北方言語研究	6. 最初と最後の頁 31-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Ebata, Fuyuki	4. 巻 13
2. 論文標題 Regularity and obligatoriness in Sakha (Yakut). A contrastive analysis with Tyvan	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 アジア・アフリカの言語と言語学	6. 最初と最後の頁 67-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計23件 (うち招待講演 6件 / うち国際学会 7件)

1. 発表者名 呉人 恵
2. 発表標題 異なるタイプの言語の対照から見える普遍性 コリャーク語と英語の場合
3. 学会等名 日本英語学会第 38 回大会 特別講演 [オンライン] 2020.11.8 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 呉人 恵
2. 発表標題 北東アジア諸言語の系統と類型 北米との関係性を視野に
3. 学会等名 令和2年度国立民族学博物館第3回共同研究会 [オンライン] 2021.3.14.
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 サハ語の名詞述語文：動詞句を入力とする派生を中心に
3. 学会等名 第18回言語学分野公開講演会 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 言語類型論から見た北東アジアのアルタイ諸語と韓日語の膠着性
3. 学会等名 2020世界韓国語大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 Rethinking the agglutinateness of Korean and Japanese: A typological study through contrastive analysis with Northeastern Eurasian languages
3. 学会等名 韓国言語類型論学会第13回国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 言語研究から関連分野への貢献の難しさ
3. 学会等名 日本シベリア学会第6回研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 呉人 恵
2. 発表標題 日本における北方諸言語研究の展望：日本北方言語学会設立を機に
3. 学会等名 日本シベリア学会第5回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 呉人 恵
2. 発表標題 古アジア諸語
3. 学会等名 富山大学人文学部第9回言語学公開講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 呉人 恵
2. 発表標題 コリャーク語の複統合性とその「新しさ」
3. 学会等名 日本北方言語学会第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 呉人 恵・藤川勝也
2. 発表標題 名詞句階層から見る英語とコリャーク語 異質性の陰に潜む普遍性
3. 学会等名 富山大学人文学部第16回「人文知」コレギウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 Contribution from descriptive and contrastive approach to historical study: A case from the Turkic language family.
3. 学会等名 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 3 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki and Arzhaana Syuryun
2. 発表標題 A contrastive study on the WH-question suffixes in Sakha and Tyvan
3. 学会等名 The 14th Seoul International Altaistic Conference” Chonbuk National University, Korea. (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 アルタイ諸語
3. 学会等名 富山大学人文学部第9回言語学公開講演会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 言語類型論・個別言語研究における証拠性：韓国語とトゥバ語を例に
3. 学会等名 言語の類型学的特徴をとらえる対照研究会 第11回公開発表会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 北東ユーラシア諸言語の膠着性・複統合性と統語的派生
3. 学会等名 日本北方言語学会第2回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 言語類型論から見たアルタイ諸言語と韓日語の形態法
3. 学会等名 韓国国語学会60周年記念冬季学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 言語類型論と周辺諸言語から見た日本語形態法
3. 学会等名 日本語文法学会第20回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 呉人恵
2. 発表標題 Divergence in the distribution of applicatives and noun incorporation in Koryak and Ainu
3. 学会等名 International Symposium Approaches to Endangered Languages in Japan and North East Asia: Description, Documentation and Revitalization (organized by NINJAL) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 The so-called evidential suffix -dir in Tyvan: Explanation from the perspective of the speaker's and the hearer's knowledge
3. 学会等名 韓国言語学会2018年夏季学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 トゥバ語の証拠性を表すとされる接辞-dirの機能：話し手・聞き手の認識からの説明
3. 学会等名 日本言語学会第156回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑冬生
2. 発表標題 トゥバ語における疑問詞疑問接辞の否定文での用法：egophoricityからの説明
3. 学会等名 日本言語学会第157回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ebata, Fuyuki
2. 発表標題 Regularity and obligatoriness in Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Tyvan ,
3. 学会等名 International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia 2 (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 江畑冬生・朱茜
2. 発表標題 形態的単位・形態類型論に関する基本概念および諸問題 服部四郎先生の学説の紹介を兼ねて
3. 学会等名 言語の類型的特点をとらえる対照研究会 第8回公開発表会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 江畑冬生	4. 発行年 2020年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 260
3. 書名 サハ語文法： 統語的派生と言語類型論の特異性	

1. 著者名 Megumi Kurebito (ed.)	4. 発行年 2024年
2. 出版社 Japan Association of Northern Language Studies	5. 総ページ数 222
3. 書名 Koryak Text 1 with Audio Materials (Revised Edition). Northern Language Studies (Extra Issue 3)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	江畑 冬生 (Ebata Fuyuki) (80709874)	新潟大学・人文社会科学系・准教授 (13101)	日本北方言語学会事務局担当 サハ語, トゥハ語研究

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	児倉 徳和 (Kogura Norikazu) (70597757)	東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・准教授 (12603)	学会HP管理 シベ語研究
研究協力者	津曲 敏郎 (Tsumagari Toshiro) (80113588)	北海道大学・文学部・名誉教授 (10101)	学会事務局補助 ウデヘ語研究 (2020年逝去)

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日本北方言語学会第4回大会（兼国際シンポジウム）	開催年 2021年～2021年
------------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------